

河野利尚 510ブルーバードがヒストリックPSを制す



ヒストリックPSを制した河野利尚選手。

新 たなモータースポーツシーズンの始まりを次げる恒例の新春ゴールドトロフィーレースが、今年も1月に開催された。ヒストリックカーのスプリントと耐久がメインとなる同大会だが、今年はN-ONEオーナーズカップの耐久レースが併催イベントとして開催された。

2017年12月以来、2度めの開催となったN-ONE耐久決勝はフルコースを舞台とする4時間耐久として、39台が参加して行われた。公式予選はなく、グリッドはAドライバーの

2018年のシリーズランキングによって決定、シリーズ2位の西郷倫規選手がAドライバーを務める#200カース東京中央200N-ONE(西郷倫規/堀尾義則/前田琴未組)がポールポジションの位置からスタートすることになった。

このN-ONE耐久はユニークなレギュレーションで知られるが、今回も「ピットインは最低10分間の滞在」、「1回の給油量は10リットルまで」といったルールが設定されたため、ピットインのタイミング等、各チームの戦略が大きくものを言うレースとなった。1人のドライバーが走れる合計

時間は120分以下に

制限され、また2回以上のドライバー交代が義務付けられたため、各チームとも3~5名のドライバー布陣でレースに臨んだ。

レース序盤は錚々たるメンバーを揃えた#272ホンダレーシング N-ONE(小山美姫/名取鉄平/長谷川大祐/山本雅史組)が首位を快走するが、#158 HC東近江☆童夢☆N-ONE(谷川達也/平尾益士/志賀孝組)がこの日のファステストラップをマークする走りでトップを奪取。スプリントレースさながらのレース展開となるが、PPの#200カース東京中央200をはじめ、早々にピットインするチームも目立ち、戦略レースの様相も顕著になる。



1. ヒストリック50分耐久表彰台の皆さん。2. ヒストリック50分耐久総合2位入賞の加藤洋一/垣内治夫組ブルーバード510。3. ヒストリック50分耐久S2クラス優勝の後藤新太郎/後藤由樹組サニークーペ1000。





4. 予選28番手から優勝を決めたBS REGNO N-ONE(ピストン西沢/富澤勝/高橋滋組)。5. 2位入賞のSnap-on N-ONE(吉田総一郎/吉田隆ノ介/谷川駿組)。6. 3位入賞のテルル・N-ONE(野田弘樹/秋吉弘亮/長島哲太組)。7. N-ONE耐久レース表彰台の皆さん。8. N-ONE Modulo(松本拓也/亀井邦裕/黒田知弘組)は4位に入った。9. 5位獲得のHYOFC&HC野崎N-ONE(手塚篤史/安岡秀徒/アントニオ ファジャルド バネソ/佐藤清/青木雄司組)。10. 6位に入ったADVAN☆N-ONE(加藤寛規/須藤裕輝/倉森章組)。11. ヒストリック耐久で3位の秋田基次/秋田幸大組(メイセイ510NRC)。12. ヒストリックPS S1クラスで3位の丹生司祥選手(bmw2002)。13. ヒストリックPS P1クラスで優勝の深江伯史選手(ボルシェ914-6)。14. ヒストリックPS S3クラスで優勝の加藤一樹選手(ホンダS800)。

20周目にはレーシングアクシデントにより、SC(セーフティカー)が入り、その後も24周目、28周目にもSCが入るやや荒れた展開となるが、レースが落ち着き、残り1時間となった時点では28番手からスタートした#800 BS REGNO N-ONE(ピストン西沢/富澤勝/高橋滋組)が首位に立っていた。#800 BS REGNOはSCが入った28周目にピットイン。15番手から29番手にまで順位を下げるが、代わった高橋滋選手がハイペースで見える順位を上げ、46周目に遂にトップに立った。

この#800 BS REGNOを追ったのが25周目にピットインしていた#76 SPMレイハートム●N-ONE(楠井義則/北嶋優一/伊藤太一組)。こちらもロングランを託された北嶋優一選手が追い上げ、56周目には#800 BS REGNOとテルル・トゥーノーズのバトルを展開するが、最終ラップとなった58周目に痛恨のガス欠でストップ。一方の#800 BS REGNOは最後は高橋選手がペースを落としながらも2番手を1分近く引き離してチェッカーフラ

ッグを受けた。

#800 BS REGNOのドライバーの一人を務めたピストン西沢選手は「結果的にピットインのタイミングが良かった。いつも耐久でコンビを組んでる仲間なんで、どういうレースをやるかという点も息もピッタリなのでその辺も大きかったですね」と勝因を振り返った。2位は#336 Snap-on N-ONE(吉田総一郎/吉田隆ノ介/谷川駿組)、3位には#909 テルル・N-ONE(野田弘樹/秋吉弘亮/長島哲太組)が入賞した。

東コースで行われたヒストリックPS決勝は15周のスプリントレースとして開催された。予選では加藤洋一(ブルーバード510/510)、河野利尚(日産ブルーバード510/N510)、秋田基次(ブルーバード510/H510)の3選手が僅差のバトルを見せたが、決勝では2番手スタートの河野選手が1周目から首位に立つと、1分5秒台のラップを重ねてリードを広げ、快勝した。

「オーナーさんからの依頼で初めてこのクルマ

をドライブさせてもらいました。東コースを走るのもヒストリックレース走るのも23年ぶりですが(笑)、クルマがバッチリ決まっていたので思うように走れました。ウェットも好きなので苦にならなかったです」と河野選手。総合2位にはS2クラスの後藤由樹選手(サニークーペ1000/KB10)が入賞し、加藤選手は3位でゴールした。

65号車は引き続き行われたヒストリック50分耐久でも絶好調。河野利尚/上松陽光/伊藤直哉組(サミット&チェック510)が同じ510ブルーバードを駆った加藤洋一/垣内治夫組(チェック510)を11秒差で下して優勝を飾った。総合3位には秋田基次/秋田幸大組(メイセイ510NRC)が入賞した。



ヒストリック50分耐久でも、ヒストリックPSを制したサミット&チェック510(河野利尚/上松陽光/伊藤直哉組)が優勝を飾った。